

5分間
リアル
脱出ゲーム

失われた シャーロック・ホームズと 10の予告状

SCRAP出版



Case.01

ビッグ・ベン盗難予告

5月末、春の終わり。あなたは急な呼び出しに応え、職場へと息を切らしながら走っていた。そこはロンドン警視庁、通称スコットランド・ヤード。

「新人っ! 貴様、遅いぞ!」

上司であるレストレード警部が容赦なく叱責する。「遅いも何も、そもそも今日は非番なのに……」と言い返したいが、呼吸を整えるのに必死で返事もままらない。警部はあなたにやけに厳しい。

「まったく、新人だってのに自覚に欠けとる。大変なことが起きたってのに」

言われてみると、署内はなんだかザワザワとしていた。日頃から荒くれ者の怒号が飛び交う騒々しい場所だが、今日の雰囲気は少し異常だ。何と言うか、妙に“浮き足立っている”ように思えた。

「ふん、まあいい。これを見ろ」

警部のジェスチャーで、ブラックウッド巡査部長が何かを持って近付いてきた。警部とあなたの間の立場であるこの巡査部長も、あなたとちょうど同じ頃に着任したばかりなのだが、ヤードには珍しい品の良い優男だった。巡査部長が一通の手紙をあなたの前に差し出すと、その内容にあなたは衝撃を受ける。

予告状

大きい鐘の音が鳴り響く日
私はとある物を頂きに参ります

そうめい
聡明な警察のみなさんなら
私が頂くものを導けるでしょう



「レ、レストレード警部。これは……犯罪の予告状ですか!？」

驚くあなたを前に、警部は苦虫を噛み潰したかのような顔をしている。

「そうだ。それもおおごとだが、問題は……署名を试试看」

「署名? ……っ、そんなまさか!」

封筒の隅に書かれた、イニシャルを示しているのだろうか、一文字のアルファベット……「M」。それはただの1/26で現れる一文字に過ぎないが、異常に不気味な空気をまとっていた。M、そのイニシャルはスコットランド・ヤードにおいて……いや、このロンドンという街において、あまりにも特別な意味がありすぎたからだ。

「そのイニシャル、そしてこの人を食ったような挑戦的な内容。……考えすぎかもしれん。あるいはただのイタズラかもしれん。だが……我々には決して捨て置けんことだ」

そう静かに話す警部の瞳には、メラメラと炎が灯っているように見えた。

「ただいまよりスコットランド・ヤードは総力を挙げてこの犯行予告状に取り組む。各員、捜査に励め!」

警部の檄に署内は揺れ、熱気に包まれた。大勢の捜査員たちが走り回り、この予告状の送り主を捕まえようと意気込む。急転する“悪夢のような”事態に半ば呆然としてみると、警部と目が合った。「これは、お前の仕事だぞ」……あなたには警部の目はそう言っているように見えた。

運命はいつも突然に、その大きな流れで人を飲み込んでいく。1893年5月末、春の終わり。あなたは1枚の犯行予告状に向き合う。それが、ロンドンを揺るがす大きな犯罪計画の始まりだとも、未だ知らずに。

Q1 予告状の謎を解き、犯人が盗もうとしているものを突き止める。

予告状

大きい鐘の音が鳴り響く日
私はとある物を頂きに参ります

そうめい
聡明な警察のみなさんなら
私が頂くものを導けるでしょう

M = 私 **M** = 私

OUCOZ が頂くもの

Q1
答え

が頂くもの

ヒント→207

答え→187

答えがわかったら次のページへ進もう →

「警部、解けました。Mが盗もうとしているのは……『時計塔』です!」

あなたが謎を解いて導き出した答えを告げると、警部は目を見開いた。

「時計塔? 大きな鐘の音が鳴り響く……まさかビッグ・ベンか!? このロンドンの象徴だぞ!」

そのあまりにも荒唐無稽な答えに、署内が戸惑いに包まれる。「あんな大きなもの、どうやって盗もうってんだ? 不可能だ!」^{いんゆ}「何かの隠喩じゃないか?」

「いや、そもそも答えが間違っているんじゃない……」あなたも自分の答えに自信が持てないでいると、巡査部長が落ち着き払って言った。

「ここでやいのやいの騒いでも仕方ありません。まずは現場に伺っては?」

刑事の基本を突きつけられ、しんと静まり返る一同。警部もウンと^{うなず}頷く。

「巡査部長の言う通りだ。ひとまず現場へ向かうぞ……ついて来い!」

※ ※ ※ ※ ※

夜が早いロンドンにしては珍しく、夜10時を過ぎてもビッグ・ベンの周りには^{にぎ}人で賑わっていた。

「これはいったい……?」

あなたが^{いぶか}訝しんでいると、警部が苦い顔をする。

「……迂闊^{うかつ}だった。明日は5月31日、ビッグ・ベンの完成記念日だ。日付が切り替わる深夜0時には鐘が鳴り、周囲は市民で大賑わいだろう。犯人はそれに乗じて何かを狙っているのかもしれない」

捜査員たちに緊張が走り、警部の指示でビッグ・ベン周囲の警戒に走る。ほどなくして捜査員のひとりが、“地面に看板で立てられている”という、実に挑発的な第2の予告状を見つけた。

Q2

予告状の謎を解き、これから起こることを突き止める。

X

①④み
を使って紙を
⑤る

③②
を使って紙を
①る

①②③④⑤ = ?

2 頭から点を取ると「辛子」

← ● ● ● →

白 髪

● ● ● ● →

頭に点を付けると「？」

尹告状

Q2 答え X が Y に Z

ヒント→228

答え → 235

答えがわかったら次のページに進もう ➡

「『針の先』が『0時』に『爆発』……なんだって!？」

導かれた答えに合わせてビッグ・ベンの時計の盤面を見上げると、微か^{かす}ながら針の先に何か異物があるように見える。だが何せ100ヤード*以上もの高さだ、果たしてそれが本当に爆弾なのかはまったくわからない。

「時計塔を盗むというのは、破壊することだったのか……？」

あなたがつぶやくと、警部が怒りを滲^{にじ}ませた声を上げた。

「そんなことはどうでもいいっ! この高さで爆発なんかしてみろ、この人出の多さだ……降り注ぐ瓦礫^{がれき}で大惨事だ。急いで上るぞ! 時計を止めて爆弾を回収しろっ!」

警部の号令に捜査員たちが一斉に時計塔の中へ駆けて行く。

「半分は残って周囲の避難誘導に当たりなさい! 1時間以内に交通規制と避難を完了させますよ!」

その一方で巡査部長が颯爽^{さっそう}と現場を仕切り始める。一瞬どちらを手伝うべきか迷うあなただったが、巡査部長に諭される。

「何をやっているんです、あなたは警部を追いなさい。きっとあなたの力が必要になるはずです。……さあ!」

※ ※ ※ ※ ※

「はあ……はあ……」

懸命に走れども早くは走れないあなたには……ましてや先に駆け出した警部の背中は一向に見えなかった。

「ふう……」

階段の途中で息を切らすと、ふと窓からロンドンの街並みが見下ろせた。

※約91メートル

ビッグ・ベンからは雄大なテムズ川が先までよく見える。

「ん? あれは……」

ビッグ・ベンの足下とは別に、川の先の方に明かりが点いて賑わっている場所がある。

「あそこでも何か催しをやっているのかな?」

物珍しさに思わず目を凝らしていると、上の方から警部のけたたましい声が聞こえ、あなたは再び上階へと急ぐ。

※ ※ ※ ※ ※

「遅いぞ。……あれを見ろ」

警部はあなたを一瞥すると、窓から下を指差す。あなたが身震いする高さにおじけづに怖気付きながらも懸命に窓から身を乗り出すと、ちょうど真下に巨大な時計の盤面があるのが見えた。そして時計の短針の先に、何か黒い袋のようなものが引っかけられているのが見える。

「あれが……爆弾ですか?」

「わからん。だが0時に爆発ということは、時限式か……あるいはあの短針が12のところまで来たら、何か作動するように仕掛けがされている可能性もある。いずれにせよ回収してみんことにはどうしようもないだろう」

「間に合いますか?」

時刻は夜11時近くになっていた。あとおよそ1時間、爆弾を回収するために急いで足場を組む手配をしているが、とても間に合いそうにはない。

「時限式だったら終わりだが……もし時計が12を指さなければ大丈夫というのなら、方法はある。時計を止めるのだ」

「ビッグ・ベンを止めるですって!？」

ロンドンの時を司る象徴とも言える大時計を止めようとは……いかに法の番人たるスコットランド・ヤードの警部といえどもその責任は重く厳しいだろう。だが、警部の瞳には決意の炎が揺らめいていた。これがかの“名探偵”の厚い信頼を得ていたという男の顔なのだ……あなたの身も引き締まる。

「警部! 借りて来ました、こちらです!」

そこにひとりの刑事が何かの書類を持って駆けてきた。それは複雑な機構が描かれた“手順書”のようなものだった。

「これは……」

「時計の止め方が書かれた手順書だ。何せ時計塔の巨大な歯車、そう簡単に人の手では引っこ抜けないし、下手にいじると壊れてしまうが、この通りに歯車を“はめれば”、安全に止められるようになっているとのことだ。……どうだ、新人。わかるか？」

やれやれ、機械の構造は専門外だ……あなたはため息をつきながら、手順書に向き合った。

Last Question

謎が成り立つように、下の4つの歯車をはめろ。そうすれば時計が止まる。4つの謎を解き、1234に当てはまる文字を順に読め。

歯車



Last Answer

1

2

3

4

ヒント→032

答え →222

大時計 手順書

歯車をはめれば時計が止まる

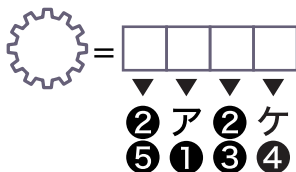
1

恩恵 生け捕り 稽古



答え 2

2



1 2 = 家

3 4 5 = ?

※違う数字には違う文字が入る

答え 3

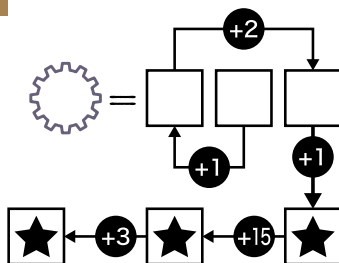
3



を逆から読んだものの
間を右から読め

答え 4

4



★を並び替えてできる
家にあるものは何？

答え 1

答えがわかったら次のページに進もう ➡

Epilogue

ギギギ……と金属の軋^{きし}む嫌な音が塔内に響き、やがて止んだ。

「警部、時計が止まりました!」

「ようし! 今の時間は!?」

「11時45分です!」

「避難は!?」

「完了しています。周囲1マイル※、誰もおりません!」

「よし! 時限式だったときに備え、全員一度退避するぞ! 急げ!」

※ ※ ※ ※ ※

その後、0時になっても爆発は起こらず、ヤードの面々は慌てて下りた時計塔を再びヒイヒイ言いながら上ることになった。11時45分で止まった短針は12の間近まで来ていた“おかげで”窓からの距離も近付き、ギリギリ回収可能な位置まで来ていた。命綱を付けた捜査員が回収作業に臨む。

「回収完了!」

歓声が聞こえる。短針の先に引っかかっていた袋を回収したようだ。捜査員が袋を抱えたまま慎重に引き上げられている。何はともあれ、これで一段落だろう。そう息をついたあなたの視界にロンドンの街並みが映る。0時を過ぎたが、相変わらずテムズ川の先では明かりが灯っている。あれはさっきと同じ場所だが……なんだか人が大きく動き回っているように見える。何か騒ぎでも起きているのか……あなたは妙な胸騒ぎが走るのを感じていた。

※ ※ ※ ※ ※

※約1.6キロメートル

スコットランド・ヤードには重い空気が漂っていた。先日のビッグ・ベンでの騒ぎの結果、回収した黒い革袋に入っていたのは……ただの食料品。爆弾の“ば”の字も無く、現場は警部の怒号が響き渡り大騒ぎだった。だが、ただの悪戯いたずらだったのならそれはそれで……と捜査員たちが胸をなで下ろしたのも束の間、署に帰ってきたあなたたちを待っていたのは、とんでもない“別の事件”の報告だった。

あの日、テムズ川のほとりではビッグ・ベンが0時の針を刻んで鐘が鳴るのに合わせて、ヨーロッパをまたぐ大きなボートレースがスタートする予定だったのだという。だが警察が時計を止めてしまったがために、いつまでも鐘は鳴らず、レースをいつ始めるか否か現場は大混乱となっていたのだ。その最中……混乱に乗じて、レースの見届人として来賓で来ていた、あるヨーロッパの王族の莫大な価値を持つ首飾りが盗まれたことが判明した。現場はさらに大混乱し、国際問題になりかねないということで、這々の体ほうほう ていで帰ってきたあなたたちは再びテムズ川の現場に急行し、帰ってきたのは翌日の昼過ぎという有り様だった。

「結局、犯人の目的は、ビッグ・ベンの時計を我々に止めさせることで首飾りを盗む機会を作る、ということだったんですね」

悔しさに臍はぞを噛むあなたに、警部も渋面じゅうめんを浮かべたまま答える。

「ロンドンの時の象徴たるビッグ・ベンを盗む……それはつまり時間を止めるということ、か。まんまとしてやられたとしか言い様が無い。クソッ!」

静まり返るスコットランド・ヤード。だが、この予告状の出し主が“M”であるならば、これは始まりでしかない。あなたはそう思ったが、口には出さなかった。それはここにいる全員がひしひしと感じているからだ。ロンドンに再び闇の時代が到来する、その予感を。



ひとりの警察官がハイド・パークの外れを歩いていた。日はすっかり落ち、
ガス灯の明かりが僅かに道^{わず}を照らすくらいだが、ランタンも持たずにスタスタと
歩き、やがて大きな屋敷に入っていく。中に入ると大きな居間に老紳士がひ
とり座って紅茶を飲んでいる。

「やあ、ブラックウッド^{うやうや} 巡査部長」

声をかけられた巡査部長は恭しくお辞儀をし、頭を下げたまま報告を始め
る。

「スコットランド・ヤードは署を挙げて予告状に取り組み、見事謎を解き明か
し、ビッグ・ベンの“爆破”を食い止めました。……あなたの予定通りです、
教授」

教授と呼ばれた男は、楽しそうに口をゆがめた。

